

数字で書かれた物語―「死なう団」顛末記

別役実

	女				男	■登場人物
解説者	//	//	//	//	//	
	2	1	4	3	2	1

その一

舞台には黒白幕が上手から下手まで引かれ、中央に演壇らしきものの一つ。

解説者 昭和十一年六月、二・二六事件より四カ月後、日蓮会館に集まった最後の十五人の党員を前にして、盟主江川桜堂は次のように語った。

諸君……

男一、現われ、演壇に立つ。

男一 (ほとんど無表情で) 諸君、思い起せばあの残忍極まる留置、拷問、傷害、不法監禁、それのみならず家を失い職は離れ、名誉も信用も毀損せられて、友人知人はおろか親類縁者にも指弾され、夜討、強盗、謀反人、前科者のように謗られ、道場は倒れ、会員は離散し、ここにわずかに残る決死の者十五名になってしまった。互に相擁し相助けんと欲しても、超大弾圧そのうえ徹底迫害を被って、半年一年二年のみならず三年も籠居の有様。いっさいの活動を禁じられて法の仕事を成すべからず、ただ何もせずじっとしていると言われてきた。これでは陽干しにならぬ方がおかしい。お上より陽干しにされる、これこそ類似死刑というものだ。法華経

の真髓たる御題目の精神、死のう、を弘めて、斯かる稀世の法難を蒙る。今生の本懐、終生の思い出、吾々のいまの満足はここにある。吾等を迫害、弾圧せし人々、父母兄弟親類その他恩ある面々に、殉教の大法会を頒つべし、配るべし。吾々は断じて自殺はしない。単なる自殺は逃避なり、逃避は即ち卑怯なり、卑怯は即ち臆病にあらずや。三歳にわたる弾圧のため、遂に餓死するまでのことなり、頑迷にして残忍極まるお上より陽干しにされるまでのこと、理不尽極まる類似死刑を執行せられるまでのことだ。何人か吾等を自殺と言うだろう。そうではない。吾等の窮死は全て当局の結果であり、殺と言えば他殺である。死と言えば餓死である。餓死前の自決も全く余人の手出しに困り、余人手出ししなければ自決はしない。つまり、吾等の自決も依然として自殺にあるのではなく他殺にある。

男2と3、「餓死殉教の行」と大書した額を持って現われ、舞台中央にすえる。

男2 (男1に) こんなもんでいいかな……。

男1 (演壇を下手に運ぼうとしながら) うん、だろうね……。

男1、演壇を持って去る。男2と3、額をつるす作業をする。

男3 だからね、俺は別にどっちが悪いとかいいとか言ってるわけじゃなくてね、ただ言い方がね、もうちょっとなるとかなるんじゃないかって……。

男2 まあ、そうだけどさ、そいつだって、いいかげん何だったんだろうからね……。

解説者 その夜、黨員たちは、会館に通じる橋を切り倒し、戸口窓口の全てに五重六重に鍵をかけて、敷地内には関係のない者の出入りを封ずることにした。餓死殉教の行は三日後に始められることになっている。その間黨員は、それぞれ遺書をしたため、自らの遺品を肉親に送った。遺言の内容は、人によって若干異なるが多くは血判で、死のうの実践は吾の本懐なり、という内容であった。肉親に会いたい者は、家に帰って会ってくるのが許されたが、誰も会館から出るものはいなかった。

男4、木箱を持って登場。男2と3は額をかけ終える。

男4 おい、さっき、何とか言ってたじゃないか、あいつ。

男2 え。そうじゃないんだよ。そうじゃなくてね、ただちよっとしつこかったから、何しただけでさ……。

男3 何だい？

男4 え。箱だよ。

男3 箱はわかっていているけどさ。

男4 いや、何かになるかと思って……。

男2 どこにあったんだ。

男4 そこにね。

女1と2が現れて、並んで正座する。

解説者 男性党員は、白鞘の短刀を肌身離さず持っていた。誰かが会館内に、目的は何であれ、一歩でも入ってくれば、それに抗議して、初めに十名が割腹自殺をする。次に桜堂が割腹の後、残った者が介錯をして首をはねる。その死体を見届けたのち介錯人二名が腹を刺しちがえる。残る二人は苦悶の表情をみせているものには介錯し、やがて青酸加里をあおるという手筈になっていた。この集団自殺が間にあわないときに備えて青酸加里を八千人分の致死量、用意していた。薬局で薬剤師として働いていた女性党員が、こっさり都合してきたものだった。致死量の二倍の分量のカプセルと、四倍にしたカプセルをつくり、それぞれ一個を左手の薬指に絆創膏で貼りつけ、残りの二個は予備として袖口と懐に入れていた。

男2、3、4と、女1、2、それぞれの方向をむいて、それぞれ仕事をしている。つまり、

男2は短刀をといでいる。男3は足のつめを切っている。男4は箱を台にして、何かを書いている。女1は繕いものをしている。女2は本を読んでいる。

男3 だから違うって言ったろう、俺はそんな意味で言ったんじゃないんだ。

女1 じゃ、どんな意味で言ったの？

男3 だからさ……。

男2 ともかく、お前がどんな意味で言ったにせよ、相手はそう思ったのさ。そりやそうだよ。
ああいう時にああ言われたら、誰だってそう思うね。

女2 そうかもしれないけど、それはしようがないんじゃないの。相手がどう思おうと、この人はそういう意味で言ったんじゃないんですからね。そういうことはよくあるわよ。

男2 いいよ。だからそれはしようがないさ、ただね、こいつが自分じゃそういう意味で言ったんじゃないから相手もそうは思わない筈だって言うからね、そんなことはないよって言ってるのさ。

男3 だけどさ、極く普通に素直に考えてみるよ。(ツメを深く切りすぎて)痛い。おお痛い。

女1 切ったの？

男3 いや……。

女2 薬箱、あるわよ。

男3 いい。大丈夫。そりや変にかんぐったり、ひねくれて考えたりすりやあ、別だけでもね。そうでない限り……。やっぱり赤チン塗っところかな、ヒリヒリする。

女2、男3に薬箱を渡す。

女1 私はね、そう思うのよ。そう思うって、つまり……。それオキシフルよ。

男3 これでもいいかな。

男4 赤チンの方がいいさ、馬鹿。

女1 私はね、何だけど、もしあなたが本当にそういう意味で言ったのなら、相手もそうとると思うの。そりやそうよ、だって、そういうことは伝わると思うわ。だから私はね、もちろんあなたにそれを意識してたかどうかは知らないわよ。それはわからないけど、もしかしたらその時、あなたの方もそう考えていたんじゃないかと思うの。だから相手も、そうとったんじゃないかしら。

男3 俺が……？ そんな馬鹿な、冗談じゃないよ。だって、考えたってわかるじゃないか、俺がそんな事考えてたなんて……。

女1 だから、意識はしてなかったかもしれないって、言ったじゃないの。

男1がやかんと、人数分の茶碗ののったお盆を持って現われ、茶碗の一つに水を注ぎ舞台中央に坐って少しずつ飲む。男4は、台の上ののった小さなものを、ペンの先でころがしている。

男1 何やってんだ？

男4 青酸カリってのは甘酢っぱい匂いがするって言うじゃないか。

男1 そうだよ。

男4 こいつは匂いはないぜ。

女2 密閉してあるからよ。やるときは噛むのよ。噛み切らなきゃ出てこないわよ。

男2 しかし、そうかなあ……。いや、今の話だけでもね、俺はどっちかって言うと、こいつがそう考えたなんて思えないんだけどね……。

男3 当り前じゃないか。

女1 無意識にって言ってるじゃないの。

男2 無意識にでもさ。

男4 (男1に) あいつの話だよ。

女2 (男1に) ねえ、あなた聞いたんでしよう。どうだったの？

男1 どうだったって……、やっぱりそう思ってるみたいだったよ。いや、くわしいことは知ら

ないよ。だって、聞かなかったからね。そうだろう……、何かこう……、いちいち聞くわけにはいかない事だしね。(男3に) お前、何て話したんだ？

男3 だからさ、言ってるじゃないか。そういう意味で言ったんじゃないんだ。本当だよ。俺はただ、何気なく、そう聞いてみただけでさ……。そうだろ。そんなこと言うはずがないじゃないか、俺が……。

男4 (男1に) 塩水か？

男1 ああ、これ飲んどいた方がいいみたいだぜ、みんなも……。

男2 俺、飲もう。(近づく)

女2 私も……。

男2 俺は信用するけどね……。

男1 どれだ、お前の茶碗は？

男2 えーと、これ。

女2 私のは、これ。

男2 お前が、そう考えて言ったんじゃないってことはね。

女2 (女1に) あなたは？

女1 入れてちょうだい。

男2 だけど、あれだぜ、お前がそう考えて言ったんじゃないけども、相手がそう考えてしまうっ

てことはあるさ。そういうことだよ。

男3 (男1に) 俺のも。これ……。

女1 私、それはおかしいと思うわ。

男2、話をしながらポケットから小さな赤いカンを出し、中のものを一さじすくって自分の茶碗に入れる。

男1 (男2に) 何だそれ？

男2 え。味の素。

男1 何で味の素なんか入れるんだ。

男2 いや、別に何だけど、さっきあそこに落ちてたから……。

女2 味の素、入れるとおいしくなるの？

男2 わからないけど、だから、ためしてみようと思って……。

女1 イハンじゃないの、そんなこと。

男2 だから、いいよ、ここにおいとくから、入れたい奴、入れれば……。

男4 俺、入れてみる。おい、注いでくれ、飲むから。

女1 ねえ、どうなの、そういうこと。

男1 (男4の茶わんに水を注ぎ)ま、いいだろう、ちょっとだから……。

男2 (男4に)入れるのか？

男4 ああ、入れてくれ。

男2 (さじですくって)これくらいか？

男4 うん、それでいい。

女2 ねえ、おいしくなるかしら？

男2 やってみればいいじゃないか、自分で……。入れてやろうか？

女2 じゃ、ちよつとよ。ほんのちよつと……。そう……。ねえ、(女1に)あなたは？

女1 入れないで。私いやよ。だって、おかしいと思うわ。

男4 (飲む)うん……。

女2 おいしい？

男4 うん……。

男2 (飲んでみる)ふん……。

女2 どう……？

男2 自分で飲んでみりゃいいじゃないか、馬鹿。

男1 (女1に)おかしいって？

女1 だってそうでしょ。そんなこといいってことにしたらキリがないと思うわ。

女2 (飲んで)おいしいわ。

男1 そうじゃなくてさ。さっき、あいつが何とか言ったら、おかしいって言ってたじゃないか。

男2 言ったた。言ったたよ。

女1 言ったわよ。

男1 それは何だい？

男3 だからね、それはね……。

男2 (男3をとめて)ま、いいから……。

男3 俺も、ちよっと入れてみてもいいか。

男2 いいよ。入れてやろうか。

男3 いや、俺がやる。(味の素を一つすくって自分の茶碗に入れる)

女1 あんた、何て言ったの？

男2 ああだからな。聞いてないんだ。人の話なんか、全然……。

女1 聞いてたわよ。聞いてたけど、もう一度はっきりさせとこうと思って聞いたんじゃないの。
いいわよ。それじゃ。つまりね、あの人の言うにはよ……。

男4 浮くぜ、これ……(茶わんの中にカプセルを浮かしてみている)

女2 本当。きつと塩水だからよ。比重の関係ね。

男3 よせよ。とけて出てきたらどうするんだ。馬鹿。

男1 大丈夫さ。ゴムだろう、これ？

女1 ゴムよ。

男4 浮くとは思わなかったな……（茶わんをかたむけたりしてみる）

女1 つまり、こうでしょ。あの人はね、この人がそう思って言ったんじゃないけど、相手はそうとってしまっただっていうのよ。

男1 うん……。

女1 でもね、私、そんなことはないと思うの。（茶わんの中を見て）あら、これゴミじゃないかしら。

男2 （のぞきこんで）本当だ。どれ……（とろうと……）

女1 （身をかわして）よしてよ。汚ないじゃないの。

男2 失礼。

男1 お茶がらだよ。こん中に少し残っていたんだ。

女1 私はね、さっきも言ったんだけど、相手がそう思ったんなら、この人も、そうだったのよ。無意識にかもしれないけど、そういうつもりで話してたのよ。そうだと思うわ。

男3 違うよ。違うんだよ。本当さ。（男1に）そんなことはないんだよ。

女2 いいじゃないの、そんなこと、どうだって。

男1 いや、よくないね。

女2 (女1に) あなた、あなたのちょっと飲ましてみてくれる？

女1 何……？

女2 ちょっと飲みくらべてみたいのよ、どれくらい違うか。

女1 (茶碗の自分が口をつけた側とは反対側を示し) そっちから飲んでよ。

女2 いいわ。あなたも飲んでみる、私の？

女1 結構よ。

男2 そりゃ、どういう意味だい？

男1 何が……？

男2 よくないって言ったじゃないか。

男1 そうだよ。よくないさ。こういうことはいいかげんにしておいていいことじゃないよ。

女2 やっぱりおいしいわ、こっちの方が……。

男1 (男3に) だって、そうだろう。お前がどう思って言ったにせよ、相手はそう思っているんだ、現に……。

男3 しかし……。

女1 出来たわ。(それまで繕っていた足袋の片一方を投げる)

男4 何だい？

女1 足袋よ。

女2 誰の？

女1 知らないわ。

男4 もう片一方は？

女1 知らないわよ。あそこに落ちてたから繕っただけ。あんた、どこか破れたとこない？ あ
つたら繕っついてあげるわ。

男4 そうさなあ……。別にないけど……。

男1 (男3に) お前平気なのか？

男3 いや、平気じゃないけどさ……。

男2 だって、しょうがないだろう。別にこいつが悪いせいじゃないんだし……。

女1 私は、さっきも言ったように、全然悪くなかったとは思えないのよ。

男4 (女2に) これも飲んでみるかい？

女2 あら、何故？

男4 もしかしたら味が変わってるかもしれない……。

女2 いやよ。自分で飲んでみなさいよ。

男1 あいつは、今でもそう思っているんだ、お前がそういうつもりで言ったんだってね……。

男3 うん……。

男1 俺はね、お前がどういふつもりでそれを言ったかどうかなんて、そんなことはどうでもい

いんだ。だから、お前が悪いとかいいとか言うんじゃない。ただね、あいつはそう思っているよ。それは事実さ。

男3 うん……。

女2 でも……、どうしようもないんでしょ、やっぱり……。

男1 だからさ、どうしようもないって言えば、それまでだよ。どうしようもないさ、事実どうしようもないんだからね。いまさら、あの時はああ言ったのはこういう意味だったなんて言うのも変だし、言えばかえっておかしなことになりかねないしさ。

女1 (何か小さなものを繕いながら) 第一、言えないわよ、私たちもうこうなっちゃっているんですもの。出てゆくわけにいかないのよ。

女2 だから……、やっぱり、どうしようもないんじゃないかしら……？

女1 でも、重要なことよ。

男1 いいよ。どうしようもないよ。だけどいいか、俺がお前なら、どうしようもないからって平然とはしてられないよ。

男3 だから、わかっているよ。俺だって別に平然としてるわけじゃないけど……。

男4 (飲んで) ちょっと変った味がする……。

女2 よしなさいよ。死んじゃうわよ。

男2 書け。な。それが一番だよ。書いとけばいいのさ。あの時ああ言ったのは、こういう意味

だっただんだった……。

女1 駄目よ。

男2 何故？

女1 決ってるじゃないの。かえって怪しまれるわよ。わざわざその事だけを書き残しておくなんて……。

男1 今なんでもいいか、今だぞ。そりゃあ、あいつだっていつかはお前のことを、そうじゃなかったんだって見直すことはあるかもしれないよ。しかし、今はそうじゃないんだ。そう思っていないんだよ。それがいやなんだ。そうだろ。それがいやだとは思わないか。

男3 だから、それはいやだよ。いやだけど、じゃ、どうすればいいんだ……。

男1 どうすればいいんだって、何言ってるんだお前は、お前にどうしろとかこうしろとか言ってるんじゃないよって、俺は何度も言ってるじゃないか。ただ、俺がお前なら平然とはしていられないよって、そう言ってるだけじゃないか。

男3 平然とはしてないよ。俺だって、何とかしたいと思ってるけど、何ともならないから……。

男2 だからね、それがいけないんだお前は。平然とはしてない、してないって言いながら、やっぱりそうなんだよ、平然としてるとしか見えないよ。反省してないせいなんだ。

男3 反省してるじゃないか。何言ってるんだ。反省してるよ。さっきから……、そうじゃないか、反省してるんだよ、俺は。

女1 反省したってしようがないじゃないの。

男2 何故？

女1 何を反省するのよ。

男4 おい、ちよっと飲んでみてくれ。

女2 いやよ。

男4 苦いみたいなんだ、少し……。

男1 (男3に) いいか、俺はお前に反省しろなんて、一言でも言ったか。

男3 わかってるよ、そんなこと。

男1 わかってるじゃない。言ったのか言わなかったのかって聞いてるんじゃないか。

男2 だからなあ、お前。

女1 あんた、黙ってなさいよ

男1 おい、どうなんだ。

男3 だから、言わなかったよ。

女1 じゃ、何故反省するの。

男3 何故って、いいじゃないか。俺はこいつの言う通りすべてやらなくちゃいけないのか？

男2 そうじゃなくてさ、お前……。

男1 いいか……。 (自分の茶碗を男4が持つのをとがめて) おい、どうするんだ。

男4 ちよつと、飲みくらべてみようと思つて。

男1 お前はそういうつもりでしゃべったんじゃないんだろ。それなのに相手がそうとつちやつたつて言うんだろ。

男3 何度も話したじゃないか、そんなこと。

女2 そうよ、この人、何度もそう言ったわよ。私も聞いたわ。

男1 じゃ、お前が悪いわけじゃないじゃないか。

男2 そうなんだよ、だからそれはね……。

男1 いいから。(と、男2をさえぎり、男3に) お前悪くないんだらう？

男3 悪くないさ。

男1 じゃ、何故反省するんだ。

男3 反省なんかしてやしないよ。

男2 (男3に) だけどお前……。

女1 あんた、反省してらつて言つたじゃないの。

男3 それとこれとは話が違ふよ。

男1 どう違ふんだ。

男3 違ふよ。

女1 だからどう違ふのかつて聞いてるんじゃないの。

男3 何言わせたいんだ、俺に。いったいみんな、何だって言うんだ。冗談じゃないよ。俺がどんな悪いことしたって言うんだ。

男1 悪いことしたなんて、これっぽっちも言ってやしないじゃないか。そうだろう。いつ言っただよ、そんなことを。そうじゃなくて、悪いことしないのに何故反省するんだって言ったんじゃないか。

男3 悪いことなんかしてないよ、俺は。そういうつもりで言ったんじゃないんだからな。だから、反省なんかしないね。するつもりもないね。

男2 いや、俺の言ったのはさ、お前が悪いんじゃないってね、そうだよ、俺は最初からお前が悪いんじゃないって言ってたんだからな。

女2 私もよ。

男3 しかし、お前、反省しろって言ったじゃないか。

男2 だからさ……。

女1 言ったわ。私も聞いたわよ。

男2 言ったよ。それがどうしたんだ。言わなかったなんて一言も言ってやしないじゃないか。

男1 何故だ？

男2 何が……。

男1 何故反省しなきゃいけないんだ。

男2 俺は反省すべきだと思うよ。だって、俺なら反省するね。

男3 何故？

男2 何故って、そうだよ。(男1に)お前言ったように、今ってことさ。今だよ。今、あいつはそう思ってるんだ。(女1に)よせよ、そんなこと。(繕いものをやめさせようとするのである)

女1 何故？

男2 だから、ちよつとの間、やめればいいじゃないか。

男1 やめろ。

女1 何故よ。

男1 今、話しあってるんだ。

女1 それじゃ(男4を指し)あの人にも、茶碗もつのやめさせてよ。そしたら私もやめるわ。

男3 今って何だよ。

男2 今さ。馬鹿。さっき、言ってたじゃないか。今、あいつはそう思っているんだ。そう考えると、俺ならそうだね、反省するね。少くとも、苛々するよ。平然とはしていられないよ。

女1 (繕いものをしながら)苛々するってことが反省するってことなの？

男2 そうだよ。そういうことだよ。つまり俺が反省って言ったのは、そういうことさ。だって、他に考えようがないじゃないか。

女1 私、苛々するってことと、反省するってことが同じ意味だなんて、思ってもみなかったわ。
女2 でもねえ、（女1に）あなたは、この人も少しは悪いって言う意見なんでしょ。

女1 そうよ。それがどうしたの？

女2 だったら、この人、反省してもいいんじゃないの。だからあなたがこの人に反省しろって言うべきなんじゃないの。

男2 そうだよ。そうなんだよ。こいつは最初からそういう意見だったんだから。

女1 いいじゃないの。反省してもいいわよ。でも、しなくたっていいでしょ。

男1 何故？

女1 だって、それは自由よ。そんなこと人に強制すること出来ないわよ。反省しろなんて、私、そんな生意気なこと、絶対人になんか言えないわ。私そんなに偉くはありませんからね。

男2 偉いとか、偉くないとか、そんな問題じゃないか。

女1 その問題よ。それが問題じゃないの、じゃ、あなたは、どういうつもりでこの人に反省しろなんて、言ったの。言えたの。あなた、この人に、そんなことが言えるほど偉かったの？

男1 じゃあ、さ、あんただったらどうなんだ。あんたがこの男だったら……、反省するのかい？

女1 しないわよ。

男2 何故？

女1 いいじゃないの。あなたは、さっきから聞いてれば、どうしてそう人に生意気な口がきけ

るの。人が反省しようとしまいと自由でしょ。

男2 何故って言っただけじゃないか、俺は……。

女1 それが生意気だっただけじゃないのよ。そうでしょ。何故私が反省しなければいけないの。悪いのはこの人よ。反省させるなら、この人にさせればいいじゃないの。いいかげんにしてよ、人のあげ足とるみたいなことするのは。私が何を考えようと、反省しようとしまいと、あなたの指図は受けないわ。私は私でやってゆけるんですからね。もし仮に、私が何か悪いことをして、反省するにしても、少くともあなたになんか反省しやしないわ。そんなこと、自分でやります。

女2 (男4に) どうしたの……？

男4 うん……。

女2 飲んじやったの……？

男4 (うなづく) ……。

男3 飲んじやった……？

男2 ゴムをか……？

男4 (うなづく)

全員、シンとして男4を見守る。

男1 で……、どうなんだ……？
女2 どうって……？
男1 ……。死なないじゃないか……。
女1 密閉してあるからよ。噛まなかったんでしょう？
男4 (うなずく) ……。
女2 どうすればいいかしら……。
男2 馬鹿だな、こいつ……。
男3 だからね、危いと思ったんだ。茶碗に浮かしたまま……、やってたからね。
女1 じゃあ……、やる？
男2 やるって？
女1 一人だけ、いかすわけにはいかないでしょ……。
男3 でも、こういう場合の事は考えてなかったし……、
男1 何か方法はないのか、下剤をのませるとか……。
女2 色んなことしないほうがいいと思うわ。このままそつとしいて、出てくるのを待つよ。
男3 出るかなあ……？
男2 出るさ、こういうものは、たいがい出てくるんだ。

男1 ま、しばらく待ってみよう。

全員、男4を見ながらじっとする。

その二

解説者 これよりほぼ九年前、昭和三年二月「日蓮会」は発足した。本格的宗教団体として発足するに当り「真日蓮主義の復活」という、十章よりなる大綱を定めたが、その第七章「大本尊を知らぬ当今の偽法華」には次のような下りがある。

男1、現われて演壇に立つ。

男1 (無表情で) 宗門並に僧侶大衆が根本的墮落に連座したから、腐るべくして腐ったのみならず、衰退と腐敗が交錯しつつ数百年を経過した。従って現在、偽法華の僧侶がやっていることは、タマラナイ訳である。下らな過ぎるのである。彼等の本尊も行法も信心も日蓮主義そのものではない。名前だけは漠然と法華の日蓮主義のと名乗っているけれども、そのやっているこ

とは全く日蓮聖人の宗教宗旨に反逆して真の日蓮主義の内敵である。漸く近代に至っては人に依り処に依り、大分目覚めて来たけれども、尚、蒙昧にして全く無智なものが大部分である。況んや形式的に改めたようでも本尊異解の謗法やその法義的解釈の偏狭放縦に至っては、吾等の糺弾すべきものあまりに多し、されど見よ、近き将来を、誓って吾等が改革してみせる。又、改革出来ずにはいないのだ。それはそのはずである。吾等は吾等の説を立てないのだ。唯だ日蓮聖人の仰せが吾等の標準である標準を凡夫共に求めてはならぬ。飽くまでも日蓮聖人に直参する吾等は徹頭徹尾この見地に立って、私の見解各々の説を認めない。何処までも日蓮聖人の御指南に任せ奉る。この故に日蓮聖人の日蓮会に従わぬものは、すなわち日蓮聖人に背く者に限る。

男1、話し終ると、演壇をもって退場。入れ違いに、男2、3、4、及び女1、2が現れ、円陣を作って坐る。男2が、持って来た風船をぽんとほおる。円陣の対角線に居るものがそれを受けとり、別の人間に、ゆっくりと投げ返す。ものうい儀式である。

解説者 明治憲法第二十八条には、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限リニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」とある。ただし、文字通りそうであったわけではない。神社神道は宗教ではなく国家の制度であるとして別格におかれ、他に「神、仏、基の三教」つまり、

天理教、金光教などの教派神道と仏教の十三宗五十六派、及びキリスト教が公認され、宗教活動上の特権もいろいろ与えられるかわりに、天皇制国家への奉仕と政治的な国民善導の役割を与えられた。この公認宗教以外の宗教は、「類似宗教」という俗称が与えられ、内務省警保局の厳重なる監督下にあった。言うまでもなく「日蓮会」もまた、類似宗教の一つだったのである。

男1が現れて、儀式に加わる。

男1 面白いかい？

男2 うん……。面白いわけがない

女1 風船がまわってくるまでに時間があるわね。

女2 その間に考えるのよ。

女1 何を……？

女2 色々なことよ。何でもいいのよ。

男4 だって、考えることなんてないじゃないか。

男3 数を数えたらどうだろう。だいたいいくつくらいでまわってくるか……。

男1 いやいや、余計なことをしちゃいけないよ。遊ぶときはやっぱり一所懸命遊ばなくちゃ。

男2 一所懸命なんだけどもね、それにしちやあ、風船の落ちてくるのがのろいんだよ。それがね……。

女1 そうよ。苛々するわね。そのとき、ほんのちよつとだけど……。

女2 でも、面白いわあ、私……。

男3 そうだね……。良く考えてみると、やっぱり、面白いね。

男1 しかし、何故これが、こんなに面白いんだろう？

男4 何が……？

男1 何が……。この遊びがさ。

だって俺たちは風船をただ投げたりとったりしているだけじゃないか。

女1 そうね……。

男1 不思議だと思わないか……？

男2 どうだろうね、この……、投げたりとったりすることに、ほんのちよつとした規則を作るんだ。そうすれば、もっと面白くなるんじゃないかって気がするんだけどね。

女1 規則を？

男2 うん。たとえばさ、投げそこなったり、とりそこなったりした奴に罰を与えとかね……。

男3 何故？

女1 何故って、馬鹿ねえ。投げそこなったり、とりそこなったりしたんだから当然でしょ。

男4 金をとるのかい？

男1 (男2に) お前どう思う？

男2 何を……？

男1 だからさ、どうしてこんなことが面白いんだ。

男2 そうだね……。

女2 私、あれだと思うわ。そんなことしてないからよ。だから、投げそこなったり、とりそこなったりしても罰を受けないからだと思うわ。だから面白いのよ。

女1 何故それが面白いの？

女2 だって、安心して出来るじゃないのその方が……。

女1 罰を与えるってことになれば、みんなもつと一所懸命になるわ。その方が面白いわよ、きつと……。

男3 だけど、遊びだからね、これは。(男1に) そうだろう？ お前そう言ったじゃないか、遊びだからって。

男1 遊びだよ。

男4 金とる遊びだってあるぜ。

男2 そうなんだよ。だからね、金とるかとらないかは別としてもね、これは規則なんだ。一所懸命遊ぶためには必要だと思うんだよ、規則が……。だって、遊びだとしても一所懸命遊ばな

くちや駄目だよ。言っただじやないか、こいつだって……。

女2 シツベにすれば？

男2 シツペ……？ まあ、だから、それでもいいけどね……。

女1 私、だけど、シツペなんかで一所懸命になれないわ……。

男1 つまり、こんなじゃないかな……。いや……、

そうか、違うか……。

男3 その……、安くしたらどうだろう。とる金の事だけ……。

男4 安くちゃしようがないよ。

男1 わかった……。

女1 何がわかったの？

男1 わかったよ。つまり、これが何故面白いかってことさ。

女2 どうして面白いの？

男1 軽いせいさ、そいつが……。

男4 軽い……？

男1 軽いだ。ね、そいつは軽いだろう？

女1 軽いわね……。

男1 だからさ。

男2 その…、軽いからか、面白いのは？

男1 そうだ。色々考えてみたんだけどね、やっぱりそうだよ。だって考えてみる、これが重かったら、面白いと思うか？

女2 重かったら、そうね…、面白くないかもしれないわね…。

男2 そうか…。しかし…うん、やっぱりそうか、軽いせいか…。

女1 重ければどうなるの？

男1 面白くないさ。

男3 そうだ。面白くないと思うね、俺も。だって、つまり、軽くて面白いわけだからね、重ければ面白くないさ…。

男4 しかし、いいか…。

男1 おい、いいこと思いついた。

女2 何…？

男1 立ってやってみよう。

女1 立って？

男1 そうだ。そうするともうちょっと面白くなるんじゃないかと思うんだ。

男2 そうか…。

皆、半信半疑で立上る。

男1 よし、これでいい。やれよ。

立ったまま再び、始まる。のんびりと風船のやりとりが始まる。

男1 どうだい？

男3 そうだね……。

男1 面白いじゃないか……。

女2 そうね……、坐ってやるよりはいいと思うわ、私……。

男2 ねえ、どうだろう。この……、今、思いついたんだけど、これ、とる時に、動いちゃいけないってことにしたら……？

女1 そうすると、どうなるの。

男2 立つ場所を決めてさ、そこから動かないでとるんだ。

女1 投げる方が、わざととれないところへ投げたら困るじゃないの？

男4 疲れるね、長く立っていると。

男3 座ってたって疲れるさ。

男1 よし、そうしよう。今日からこれは立ってやることにしよう。その方が、坐ってやるよりもずっと面白いってことがわかったからな。

男4 いつもかい？

男1 まあ、だからさ、どうしても坐っておりたいっての時は別だけどさ、なるべく立ってやった方がいいと思うんだ。だって、その方が面白いんだからね。これはしょうがないよ。

女2 いいわ、私は。そりやたまには坐ってやりたいと思うときがあるかもしれないけど、たいていは立ってやった方がいいって思うと思うわ……。

男3 (男4に) 運動にもなるしね、立ってやった方が……。

男2 (男4に) だからさ、言えればいいんだよ、どうしても坐ってやりたい時にはね……。

男1 みんなも考えていいよ。つまり、これがどうやってたら面白くなるかについてね。そうだろう？ 始めたときより、色々工夫したおかげで、大分面白くなったじゃないか。もっと工夫すれば、もっと面白くなると思うんだ。

男2 でね、さっきもちよつと言ったんだけど……。

男1 (男4に) お前、坐りたいのか？

男4 いや、いいよ。

男2 この……、立つ場所を決めといてね、そこから動いちゃいけないってことにしとけば……。
女1 変なところに投げられたらどうするのよ。

男2 だから、そんなことしちやいけないってことにしとけば。

男3 いけないっていったって、やるやつがいるよ。

男2 何故？

女1 何故って、馬鹿ねえ、居るわよ。私だったらそうするわ。

男1 (男4に) だからさあ、俺は絶対に坐っちやいけないなんて言ってるんじゃないんだぜ。

男4 (ほとんどびっぺりして) いや、だって、わかってるよ、そんなこと……。

男1 わかってるだろうけどさ、そういう意味じゃないんだよ、俺の言ってるのはね。俺はただ、坐ってやるよりも立ってやる方が面白いって言うから、そうやってみようって言っただけじゃないか。

女2 だから、大丈夫なのよ、それは。この人、別に立ってやるのに反対してるわけじゃないんだから。そうでしょう。反対じゃないでしょう。

男4 反対じゃないよ。

男1 何かねえ、みんな、わかってないんじゃないかって思うんだ。俺はただ工夫して何とか面白くしてやろうって考えてるだけだからな。そうだよ。俺が立ってやりたいわけじゃないんだ。立ってやるほうが面白いって言うから、じゃあそうしてみようって言っただけでね。坐ってやった方が面白いって、何かそういう工夫があれば、それだっていいんだ。坐ってやって、こうしてやればって、何か具体的なあれがね、(男4に) お前、あるのか？

男4 いや、だから、ないよ。

男1 ならいいじゃないか。そんなに……、あれするなよ。

男4 俺はだって、別に何んにも……。

男1 だからね、いいよ。いいけどね、もう少しみんな積極的になってもいいと思うんだよ、何するのにさ。だって、さっきから俺だけだよ。考えてるのは。面白くしようと思って工夫してるのは。そうだろ。(男4に) お前、何かしたか？

男4 ……。

男2 俺は、だからさ……。

女1 あんなのは駄目よ。

男2 だけどね、投げるほうにも、あれすればいいじゃないか。手の届かないようなところへ投げたら、それは、投げた方が悪いとかね……。

男1 (男4に) みる、こいつは工夫してるじゃないか。そりゃあ、いい方法かどうかはわからないよ。でも、少くとも、何とか面白くしようって考えてるんだ。な、そうだろ、つまらないことでも何でもいいんだよ。こういうことはね、みんながその気にならなければ駄目なんだ。だって、せっかく会をつくって、みんなでその会員になって、何とかやってこうってことになつたんじゃないか。これはそのみんなの遊びだからね。

女2 (男4に) だから、あんたも考えればいいじゃないの。何か、もっと面白くなるようなこ

とを……。

男1 だけどね、あれだぜ。何だけど、これはこれで、もう充分面白いはずなんだよ。だって、坐ってたのを立つように工夫したんだからね。それはみんな、そうだと思うんだ。な、面白いだろ、これはこれで？

男3 いや、面白いよ。

男1 そうなんだ。面白いんだよ。だからもっと面白いことを考えるって言ってもね、これが面白くないからとかそういうんじゃないかね……。

男2 もちろんそうだよ。だから俺はね、これがつまらないからじゃなくて、さっき言ったのは、ああすればもっと面白くなるんじゃないかって……。

男1 (女1に) 面白いだろう？

女1 私、つまらないなんて、一言も言いやしなかったわ。

女2 だから、あれでしょ。このやり方がつまらないから、もっと面白いやり方を考えるんじゃないかって、面白いんだけどもっと面白くするにはどうすればいいかって考えればいいんでしょ。だって、私、そうよ。そういうつもりで言ったのよ。

男1 いや、あんたの言い方がどうのここのじゃなくてね。だってこれは基本的なことだからね、会の運営上の……。

女1 (男4に) どうしたの？

男4 え……？

女1 面白くなさそうな顔してるじゃないの。

男4 面白いよ。

女1 本当の事言ったらいいじゃないの。面白くないんでしょ、あんたは。

女2 いいじゃない。放つときなさいよ。いつもこうなのよ、この人は。

女1 でも、面白くないんだったら、はっきり言った方がいいと思うわ、私。だって一人だけ何となくつまらなそうにしていると、不愉快よ。

男3 (男4に)だから、休めばいいじゃないか。な、そこで休んでろよ。いいよ。そんな……。だって、これは遊びなんだからさ。疲れてるんだらう？

男1 (男4に)おい、面白くないのか……？

男3 疲れてるんだよ、ただ。さっきそう言ったよ、疲れたって。

男2 疲れてやしないよ。だって……、疲れるわけじゃないか、こんなことで。

男1 おい、言ってみろよ、面白くないのか？(風船投げは一時中止)

男4 面白いよ。

男1 だって、ちっとも面白そうじゃないじゃないか。

女1 面白くないのよ。私にはわかるわ。どうしてそう言わないの、面白くないって。言えばいいじゃないの、はっきり。

男4 何言ってるんだ。面白いて言ってるじゃないか、さっきから。

女1 正直に言ってごらん。本当の事を言うのよ。

女2 ねえ、休みなさいよ。この人休ませて、私たちだけでやりましょうよ。

男1 おい、どうなんだ、本当の事を言ってみろ。面白くないのか？

女1 面白くなくたっていいのよ。ちつとも悪いことじゃないわ。そう考える人だって居るはずよ。当然でしょ。一人一人みんな違う人間なんだから。

男1 いや、もちろんそうだよ。でもね、さっきも言ったろう？ 面白くないんだったら、どうやったら面白くなるかってことを言うべきだよ。面白くない、面白くないって言うだけなら、誰にだって言えるんだからね。(男4に) そうだろう。だからお前、面白くないんだったら、面白くなるやり方を言ってみろ。

男4 だから、いいよ。俺は少し休むよ。

男1 何故？

男4 疲れたからさ。

男2 何故疲れたんだ？

男4 何故疲れたって、何言ってるんだ。そんなこと、わからないよ。

男2 わからないはずないじゃないか。だってお前、俺たちと一緒に始めて一緒にやってきたんだろ。疲れるんなら、俺たちも疲れるはずだよ。なのに、どうしてお前だけが疲れるんだよ。

男3 だけど、それはあるんじゃないかな。たとえば、みんな疲れなくて、一人だけ疲れちゃうってこともさ。

女1 あるわよ。でも、それにしても理由がある筈ね。どうして一人だけ疲れたのか。

男1 いいか、俺はね、疲れたか疲れてないかを聞いてるんじゃないんだ。そうだろ。何故休むのかって聞いているんだ。だって今はみんなで遊んでいるんじゃないか。一人だけ勝手なこと言って、疲れたから休むなんて言ったら、どうなると思う。そんなこと言えば誰だって疲れてるんだよ。俺だって疲れてるよ。へとへとで今にも倒れそうだよ。だけど我慢してやってるんじゃないか。

男4 しかし、お前……

男1 だから、いいよ。お前疲れたからってやめるんなら、俺たちもやめるよ。

女1 それがいいわ。やめましょうよ、みんな。

男2 俺もやめた。全然やる気しなくなったよ。

男1 な、だからさ、こうなるんだよ。みんなで作っているんだから、今は。お前、みんなにやめさせたいのか？

男4 そんなこと言ってやしないじゃないか。ただちよつと疲れたから俺だけ休むって言うてるんだ。

女1 あなたがやめるんなら、私たちもやめるのよ。

男4 何故……？
男1 しようがないよ、それは。みんなそう言ってるんだから。
男2 俺はやめるよ。
男3 やろう。ね、そんなに疲れてるわけじゃないんだろう。たいしたことはないよ。
女2 だから、ちょっと休めば？ ちよっと休んですぐやるのよ。そうすればいいじゃない。
男4 いいよ……、だから、そんなに疲れているわけじゃないんだから……。
男3 じゃ、やるかい？
男4 ただ、ちよっと言ってみただけなんだから……。
女2 やるって。やりましょう。
男2 いやだよ、またすぐ疲れたなんて、言い出しちゃあ。
男1 とにかく、決めよう。やるかやらないか。これは全体の問題だからね。
女2 やりましょう。
男3 やるよ。お前もそうだろ？
男4 ああ……。
男1 よし、じゃ、やろう。

再び、ものうく始まる。みんな、何となく白々しい。

男2 ねえ、さっき、俺の言ったことだけどさ……。

女1 (男4に) 面白い？

女2 いいじゃないの。やってるんだから。

男1 わかった。

男2 何が……？

男1 もっと面白い方法があるんだ。

女1 何？ どうするの？

男1 でもどうかかな、さっきから、俺ばかり言ってるからな。いいよ、お前たち先に言えよ。

男3 先につたって、俺たちは別にないよ。

男2 だから、俺のはさ、さっきも言ったけど、この……一人一人場所を決めといてね、そこから動かないでとるんだ。つまり、いいかい……。

男1 よし。いいよ。言っちゃおう。言うけどさ。つまらないならつまらないって言ってくれよ。俺ばかり言って、妙に押しつけみたいにとられるのはいやだからな。

女2 大丈夫よ、そんなこと。私たち、言わないのは、私たち考えつかなかっただけなんだから。

女1 どうするの？

男1 どうって……、いや、簡単なんだけどね。みんなは、ないんだな？

男3 ないよ。

男2 俺のは、さっき説明したやつだけさ。もっとも、もうちょっと、考えてることがあるんだけどね……。

男1 そのね……。いや、簡単なんだよ。ちよっと考えるとあまり面白くないみたいんだけど、でも、良く考えてみると、案外面白んじゃないかと思うんだ。

やや、間。

女1 どうやるのよ。

男1 いや、だからさ、つまりね……。片足でやるんだ。

女1 片足で？

男1 うん。

女2 けんけん？

男1 そうなんだよ。だからね、こういうふうにしてさ……。 (やってみせる)

男2 そうさなあ……。

男1 面白いと思うんだよ、俺はね。だって片足なんだからさ。両足じゃないんだから。ね、これは面白いよ。

男3 それで……？

女1 だって、それだけよ。そうなんでしょ？

男1 そうだけど、これだけって何だよ、これで充分面白いよ。とにかく、これまで両足でやってたのを、片足でやるんだから。

男3 いや、だからね、もし間違っただ両足で立っちゃったらどうするのかと思って……。

男1 何故両足で立つんだ？

男3 だからさ、間違えて……。

男1 間違えるわけないだろう、こんな簡単なことなんだから。

男2 この、こういうことじゃないかな。つまりこいつはね、風船とろうとしてよろけてさ、思わずもう一つの足をついしまった場合だね……。

男1 すぐ持上げればいいじゃないか。

男2 すぐ持上げる……？ そりゃそうだ、それでいいんだ。

女1 だけどね、そんなことしない方がいいんでしょ。だって、よろける度に片足ついていいんだっつたら、みんなそうするわよ。

男1 よろける度に片足ついていいなんて、俺はこれっぽっちも言わなかったぜ。もし、ついてしまったら、持ち上げればいって言っただけじゃないか。

女1 そうよ。そりゃわかかってるけど……、だから、あれでしょ、もう一つの足は、いつも持上

げてなくちゃいけないってことでしょ。

男1 そうだよ。

女1 それで……、そうでしょ。そう決めたでしょ。決めたわね。それでも、片足ついちゃう人がいると思うのよ、思わず……。

男1 だから、その時はすぐ持ち上げればいいって言ってるじゃないか。何言ってるんだ、みんな。何か……、わからないかい？ 要するに……、簡単なことじゃないか。片足でやるんだよ。両足でなく。それだけじゃないか。

女2 いいじゃないの。それでいいわよ。やりましょうよ。罰金とるなんてのは私反対よ。

男2 そんなこと誰も言ってやしないじゃないか。

女2 私、面白いと思うわ。とにかく、やってみましょう。

男1 面白いんだよ、これは、とにかく面白いんだ。何故面白いかって言うとだね、これはほら、両足でやるよりもふらふらするだろう。だからさ。やるかい？

女1 いいわよ。

男3 俺も、いい。

男1 (男4を見て) だからさあ、そりやそうだよ。そんなことはわかってるよ。しかし、いいかい……。

男4 何が……？

男1 何がじゃないよ。あれだろう、そう言いたいんだろう、疲れるって……。

男4 言ってやしないじゃないか。

男1 言ってなくたって思ってるよ。だけど、いいか。疲れないことなんてないんだぜ。俺はこの前赤十字の先生に聞いたんだけど、人間は寝てたって疲れるんだからな。

男4 だから、いいよ。俺は疲れたくないなんて言ってやしないよ。

男1 じゃ、何が言いたいんだ？

男4 俺が……？

男1 そうさ。

男4 俺はさ、どんなことがあっても足をおろさないよ。それから風船をとりそこなったりもしないよ。どんなことがあってもね。

男1 ……。

女1 それ、どういう意味……？

男4 何なら、場所決めといて、そこから動くなかって言ってもいいよ。それでも俺は、片足で風船を撮ってみせるよ。

男2 で……、失敗したら……？

男4 何でもやるよ。

女1 罰金払う？

男4 払うよ。

女2 やめましようよ、そんな……。だって、つまらないじゃない。

女1 何故？

女2 いやよ、私。そんなだったら、やめるわ。

男2 だから、こうすればいいじゃないか、罰金安くしてさ……。

男4 罰金は高い方がいいよ。

男3 しかし、お前……。

男4 いいよ、みんなは安くもいいよ。払わなくたっていいさ。これは、俺のことを言ってるんだからな。俺はそうするよ。俺が一人で決めたんだから。俺は、失敗したら有金全部払うよ。

貯金通帳のも全部ね。

女2 やめましようよ。ね、こんなことってないわ。だって、そうよ、こんなのは無茶よ。

男1 いや、いいよ。そうしよう。でも、金はやめよう。

男4 何で……？

男1 金なんかいらさないよ。そのかわり、いいか、失敗したら、死ぬんだ。

男4 ……。

男1 (男4に) いいか……。

男4 ……いいよ。

男1 死ぬんだぞ。

男4 死ぬよ。

男1 風船よこせ。(受け取り、男4に)片足で立て……。よし、動くなよ。いくぜ……。

男1、ふわりと風船を投げる。男4の上に落ちかかるが、男4は動かない。

その三

解説者 他宗派、特に日蓮宗諸派に対する攻撃と、熱狂的な布教活動によって一時隆盛を極めた「日蓮会」もこうした新興宗教にまつわる話としてよくあるパターンであるが、盟主江川桜堂の女性問題 関するスキャンダル事件にまきこまれ、みるみる衰微していった。そして昭和八年。

男1、突然現われて、叫ぶ。

男1 そうだ。そこだ。理窟よりは覚悟だ。そして実行だ。真日蓮主義にいわゆる信伏随従、給

仕第一と喝破する所以のものは、実はこれなのだ。下手な考え休むに似たりだ。蓮の葉の上の蛙のように、考えるばかりで死んでしまう。くだらなく畳の上で腐って仕舞うだけだ。獅子身中の虫は必ず考え、必ず屁理窟をこねる。考えることはない。いやむしろ考えてはならないことなのだ。「日蓮が弟子檀那、別の才覚無なり」である。今の世の中はどうだろう、余りに理窟外れではないか。やれ皆帰妙法の、やれ娑婆即寂光の、法国冥合の、世界統一の、そして絶対平和だの、ただ吠えるばかりで、実際にどこでどれだけ何をどうしたか？ 何もできぬではないか。吠えるといえば聞えがいかいけれども、実は悲鳴をあげているのだ。馬鹿でもチョンでも皆自分の考えはいいと思っている。そうしてくだらない一生で終わってしまうのだ。皆うぬぼれて偉そうに屁理窟ばかりこねているけれども、その一生をみるがよい。何もろくなことは出来ぬではないか。

解説者　そこで、七月二日、党員の中から選ばれた二十八名の男女精鋭党員は、「永遠に目的はなく、生還も期さない旅」つまり殉教千里行に旅立った。

男2が「殉教千里行」と大書したのぼりをもって現われる。男3と4、女1と2がつづいている。男2、舞台正面をむいてしゃがむ。以下、それにならう。何かを待っているようである。それぞれ、靴をぬいで中に入った小石をとったり、煙草を吸ったり、何かを拾っ

たり、拾ったものを目の前に並べたり、している。やや間。

男2 (男3に) 数を数えてみようか？

男3 数を？

男2 うん。

男4 (男3に) 何だって？

男3 数を数えてみようかってさ。

女1 何の数を数えるの？

男2 いや、ただ、数をさ。いち、にって……。

女2 どうして？

男2 別に……。ただそう思っただけさ。どこまで数えられるかと思って……。

男3 いつまでに？

男2 いつまでもやったらさ。

女1 いつまでもやったら、どこまでも数えられるわよ。

男4 何故？

女1 何故って当り前じゃないの。いつ迄もやるんだから、どこまでも数えられるわよ。数は無限にあるのよ。

女2 でもさ、今までみんな、どのくらいまで数えたのかしら。

男3 みんなって……？

女2 だから、誰でもいいんだけど……、そういうことやった人いないのかしら。

女1 それ、どういう意味？

女2 いち、にっ、さん、て数えてよ、足したり掛けたりしないで、ただ数えるのよ。それで、どこまで数えられるかって……（男2に）そういうんでしよう？

男2 そうだよ。

男3 いないんじゃないかなあ……。

男4 何故……？

男3 いや、知らないけど、いないと思うよ、そんなことした人は……。

女1 だから、あれならね……。三日間でどのくらい数えられるか……。

女2 そうね……。

男2 だけど、時間を区切るなら、ただそいつが口が早いか遅いかだけのことじゃないか。

女1 そうよ。そんなことわかってるわよ。でも、言ったでしょう、いつまでも数えてたら、どこまでも無限に数えられるわよ。

男4 やって見た奴はいないんだね、今まで誰も……？

女1 いないでしょうね……。

女2 でも、どうなるのかしらね、その先の方へ行くと……？

男3 先の方って……？

女2 だから、その……、誰もまだ数えたところのないところよ……。

男3 計算ではわかっているんだからね。

女2 でも、こっちはひとつひとつ数えていくのよ。

男4 だけど、誰かいるんじゃないかなあ、誰にも言わないでさ、ここまで数えたって奴が……。

男2 居ないと思うけどね、俺も……。

男4 そうか……。

男3 だけど、大変だよ、これは、お前……。

女2 やるの？

男4 その……、あれかい？ やめたくなったら、やめるって言えればいいのか？

男2 ……だね。つまり、そこまで数えたってことになるわけだ、お前は。

女1 あなた、わかってるの、それがどういふことか？

男4 だから、やめたくなれば、そこでやめればいいんだらう？

男2 そうだよ。たいしたことじゃないよ。誰もやったことがないんだから、別に恥かしいこと
もないよ。ほんのちよっとしか数えられなくてもね。

女2 これから……、今すぐ始めるの？

男4 だって……、何故？

男3 ここでかい？

男4 いや、どこか他へゆくかい？

女1 場所なんかどうでもいいけど……でも、どうなのかしらね……。

男2 そんなに大きさに考えなくてもいいんじゃないかな。やめたくなったら、そこでやめればいいんだし……。

女2 そうね……。

男3 うん。だけど、もうちょっと考えてみようか、これで……、どうなるか……。

男2 どうもなりやしないよ。おい、やれ。

男4 いいかい。じゃあ……。

やや、間。

女1 どうしたの……？

男4 うん……。いや、やっぱり一からはじめるのかな……？

男2 そりや、そうだよ。

男4 えーと、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十……。 (以下無限に)

間もなく、男1、登場。男4、やめる。

男2 (男1に) どうした……？

男1 俺たちは、逮捕されたぞ。

解説者 殉教千里行に参加した二十八名の精鋭会員は、七月二日午前十時横浜の杉田梅林に集合、鎌倉八幡宮で盟主江川桜堂と落合うべく、「死のう」と叫びながら金沢街道を行進、金沢文庫付近で昼食をとり、逗子の桜山で野宿中、急を聞いて駆けつけた神奈川県誓の警官二十名に全員、逮捕され華山署に連行された。神奈川県警は背後関係を徹底的に洗うことを決定し、真夜中の非常呼集で県特高課長を先頭に右翼係、及び左翼係の刑事を全員動員し、更に川崎署や横浜市内の各署の特高刑事にも呼び出しがかかった。取調べは苛酷を極め、背後関係のないことが判明した後は、取調官は黨員に「転向」をすすめることに勢力を集中した。もちろん、当の取調官に、彼等が何者であり、従って何者に転向すべきであるという、確としたものがあつたとは信じがたい。当然彼等も、それが何を意味するものであるかは知らなかった。彼等が知つていたのはただそれをしてはいけない、ということだけであつた。

男1以下、全員そのまま。ただ良く見ると一人一人じゅずつなぎに縛られているのわかる。男4、数えている。

男4 五億六千二十一万八千九百五十六、五億六千二十一万八千九百五十七……（以下無限に……）。

その四

黒白だんだん幕の前に机が並べてあり、食事の仕度が出来ている。ごはん茶碗、味噌汁の碗がそれぞれ一つずつ、たらこを盛った皿、焼のり、たくあんをのせた皿などがいくつか。
男1、2、3、4、女2が正面を向いて席に着いており、女1がごはんをよそってやっている。

解説者 餓死殉教の行をはじめてほぼ二カ月目に彼等はそれを中止した。

女1 いいわよ。

全員（口々に）いただきます。

食べはじめ。

解税者 彼等は、彼等の餓死殉教の行を、異常な集団自殺と受けとめられることをふせぐため、「殉教要録」及び「殉教遺書」という二冊のパンフレットを作り、彼等の真意を伝えるべく、それを、内閣総理大臣、内務大臣、警視総監、内務省警保局長、保安課長、図書課長、政友会、民政党、国民同盟、東方会、社会大衆党、国柱会に送った。しかし、反響は何もなかった。もちろん、餓死行を中止したのはそのせいではない。十五人の死体を引取り、仏にすることを約束していた人物が急死したからである。

男2 何だって？

女1 だから、何度言ったらわかるのよ。一人、たらこが一はらにおのりが五まい。

男3 一はらっていうのは二本のことだね。

女1 そうよ。だけど、わかってるの、こういうふうになって、くっついてる二本よ。

男3 だから、これだろう？

女2（男4に）あなた、おのり、数えながら食べてよ。

男4 数えながら……？

女2 一人五まいよ。あんた、自分で何まい食べたか覚えてる？

男4 まだ、五まいは食べてないよ。

女1 駄目よ、あんた、そんないいかげんじゃ。これはきちんと五まいずつしかありませんからね。誰かが足りなくなるのよ。何まい？

男4 えーと、四まいかな……？

男3 三まいだよ。だからあと二まい？ ここにわけといてやるよ。いいか、これがお前のぶんだけ。

男1 たくわんは？

女1 三切れよ。お正油……とってくれる。味の素も。

男2 わけとこうか、わからなくなるといけないから。

女1 何故わからなくなるの。はっきりしてるじゃないの。たらこが一はらに。おのりが五まいに、たくわんが三切れよ。

男3 (男4に) お前のたくわんはこれだぞ。

男4 俺たくわんいらぬ。

女2 何故？

男4 食いたくないんだ。

男3 なあ、こういうのはどうする？

女1 いいじゃないの、そんなの、適当にあれすれば。

男2 じゃ、俺もらう。

女2 私も。

男3 俺も……。

男1 (男2に) お前、かわりに、のり一枚、あいつにやれ。

男2 何故？

男1 たくわんもらったんだろう？

男2 しかし、あいついらないうって言ったんだぜ。

男1 のりならいらなくないんだ。

男2 ま、いいや。やるよ。おい、これお前の分だ。

男4 ああ、どっかその辺においといてくれ。

男3 そうか……。じゃ、俺もこれ……。いいな。置いたぞ。ここからこっちがお前の分だからな。

女2 でも……。あたし、それじゃ、返すわ。だって、おのりあげるくらいなら、もらいたくないわ、たくわんなんて。

男1 (男2に) お前。食いかけのたらこをここへおくな。

男2 何故？

男1 間違えるじゃないか、ひとのと。

男2 しかし、お前……

男1 飯茶碗の中へ入れとけよ、馬鹿。

男3 いいよ、それじゃ。俺の、こっちへもらうから。

女2 あら、あなた、たらこにお正油つけるの？

女1 そうよ。

女2 だって、変じゃない。

女1 いいじゃないの。私、いつもこうしてるわ。(男4に) あなた、気をつけなさいよ。

男4 何が……？

女1 こぼしたでしょ。みっともないわねえ、いくつになつたのよ。

男3 ほら。そこだよ。そこ……。

男4 ああ、これか……。

男1 うにがあつたらう？

女1 あれは明日。

女2 おいしい？

女1 何が……？

女2 お正油かけて……。

女1 やってみればいいじゃない。

女2 お正油ちようだい。味の素もね。あら、誰、こんなところに青酸カリおいといたの。

男4 (受け取ってポケットに入れる)

女2 気をつけてよ。

女1 どうしたの、それ？

男4 どうしたって……？

女1 (男1に) あれ、全部集めたんじゃないの？

男1 集めたよ。しかし、三個ばかり足りなかった。

男2 足りなくちゃ困るじゃないか。

男1 そうなんだ、しかし、足りないんだよ……。何するんだ。

男2 (めしに味噌汁をかけようとしている) 何って？

男1 よせ、そんなこと。

男2 何故？

男1 何故じゃないよ、みっともない。よくそんなものが食えるなあ。

男2 そうかい。だって……、そうかなあ……。 (やめる)

女1 (男4に) お出し。

男4 え……？

女1 今の、出すのよ。

男4 (青酸カリのカプセルを出す)

女1 (受け取り) いくわよ。(男1に投げる)

男2 よせ。

女1 何よ。

男2 危いじゃないか。

女1 誰。あと二個よ。いやらしいわねえ。出すときはみんな出せばいいじゃないの。

男1 いや、もっとあるかもしれないよ。

女1 だって、三個足りなかったんでしょ。

男1 だいたいね。正確じゃないんだ。そうだろう、いくつつくったんだ？

女2 忘れたわ。

女1 いやらしいわねえ。私、本当にいやらしいと思うわ。不潔よ。あんなものいつまでも持つてるの。

男2 いやらしいかねえ。

女1 いやらしいわよ。

男2 何故？

女1 みだらよ。だってそうでしょ。夜中に一人で出して眺めたりしているのよ、その人は？

男4 (女2にたらこの半分を) 食うかい？

女2 だって、あなた、食べないの？

男4 いらぬ。

女2 そう、じゃあれだけど……。 (もらう) でも、私、あげるもんはないわよ。

女1 よしなさい。

女2 あら、何故？

女1 よしなさいよ、いやねえ。

女2 いいじゃないの。(女1に) あなた半分食べる？

女1 いやよ。何言ってるのよ。そういう意味じゃないわよ。本当に。気がしれないわ。

女2 そうかしら。(男3に) あなたは？

男3 いい、俺はまだある。(男4に) おい、こののりお前の分だぞ。

男4 ああ、わかってる、お茶……。

女1 もうお茶なの？

男4 うん。だけど、こののりは食べるんだよ。お茶でね……。何だけど……。

女1 何よ。

男4 いや……。別に、あれだけさ……。

女1 何、言いたかったの。

男4 だから、そうじゃなくて、ただ……。

女1 あなた、私そののりちようだといって言うと思ったの？

男4 そんなこと、言いやしないじゃないか。

女1 それじゃ何故、そののり食べるだなんて、わざわざ、ことわるのよ。

女2 いいじゃないの、そんなこと。

女1 よくないわ。だって、あなた、正直に言ってよ。そうなんですよ。私そののりちようだ
いって言うんだと思って、それでそう言ったんでしょ。

男4 俺はだって、ただ……、そう言っただけじゃないか。

男1 どうしたんだ。

男3 いや、あのね……。

女1 いいわよ。あっちには関係ないんだから。

男1 (男2に) どうしたんだ。

男2 うん、だからね……。

女1 (男4に) どうなの？

男4 どうなのって、何言ってんだ。

男2 (男3に) 何だ、あいつがのりくれて言ったのか……？

男3 いや……。

女1 ふざけないでよ。いつ私がそんなこと言ったの？ いつよ。あなた、それ聞いたの？

男2 いや。だから、聞いてるんじゃないか。

女1 あんたたちは関係ないって言ったでしょ。余計な口ださないでよ。だって、そうでしょ。私がそんなこと言うわけないじゃないの。反対よ。私はそんなこと一度も言わなかったってことを言ってるんじゃないの。言わなかったのよ、私は。

男2 (男1に) 何だかわからないね。

女2 だからね、この人が、のりあげないよって言ったのよ。

男1 誰に？

女2 この人に。

男4 言わないよ、俺、そんなこと。

女1 あら、何？ 言わないって言うの？

男3 だからさ、自分で食べるって言ったんだろ？ これをね、これはこいつの分なんだ。

男1 (女1に) くれて言ったのか？

女1 言わないわよ。さっきから言ってるじゃないの。そんなこと一言も言わないのよ。

男1 ……。

女1 何故？ 何故いいの？

男1 何故って……。(男3に) そいつは、奴の分なんだろう？

男3 そうなんだよ。

男1 だからさ、奴が奴の分を自分で食べるって言ったって……。

女1 そんなこと言ってやしないじゃないの。そうじゃないわよ。

男2 どう違うんだい。だって、奴は自分の分を自分で食べるって言っただけなんだろう？

女1 うるさいわねえ、黙っててよ……。そうじゃないのよ。私が言ってるのは全然別のことよ。

男1 なんだよ、それは？

女1 だから、黙っててって言うてるでしょう。今、考えてるんだから。

男2 考えなくちゃわかんないのか。

女1 (手にもった箸を男1にぶつける)

女2 あのねえ、こういうことよ。

女1 黙っててよ。

女2 わかってるのよ、私は。こうでしょう。つまりね、この人はね、のりくれとも何とも言わないのに、この人が、これは自分で食べるんだって言ったの。

男2 いいじゃないか。だって、それはそいつの……

女1 黙ってなさい、あんたは。

女2 ともかくよ、この人が、これは自分で食べるって言ったの。それだもんでさ、だってそれ

じゃこの人が、のりくれて言ったみたいじゃない、で、怒ったのよ。

男1 だけど……、言わなかったんだろう。そんなことは……？

女2 だから、言わなかったのよ、それは。

男1 なら……。

女1 わかったわ。(男4に)あなたが言えいいのよ。正直に。いいわね、正直に言うのよ。さあ、言っでござんなさい。そうなんでしょ。あれでしょ。私がそう言うと思って言っでしょ。だから、あれよ、私がそれを……、のりをくれて言うんだと思って、それで言っでしょ。これは自分で食べるんだって。そうでしょ、そう思っでわね。

男4 いや……、だっで、俺は別に……。

女1 いいなさいよ、正直に。何でもないじゃないの。さあ、早く、そう思っで言えいいのよ。

男2 だっで、そいつがどう思っでかなんて、わかるわけないじゃないか。

女1 わかるわよ。少くともこの人にはわかるわよ。本人なんですからね。この人が思っでんだから。だっでそうでしょ。そう思わないで、どうして、わざわざ私に、これは自分で食べるんだ、なんてことわるの。わざわざよ。私によ。

男3 まあ、いいじゃないか。もうよそうよ、つまらないよ、こういうことは。ね、何か感違いなんだよ。な、やめよう。だからさ(男4に)お前も、何だっでたら、これ一まい、やれば。(の

りを示す)

男4 だから、いいよ、それは、やるよ。

女1 (かっとして) 何よ、何よ、いったい、それは。何言ってるのよ。冗談じゃないわよ。違うじゃないの。私が、いつ……。いやよ。私、もう絶対いやよ。そうでしょ。何。何よ、それは。何の真似？

男3 だから、俺はさ、ただ……。

女1 違うじゃないの。違うでしょう？ わからないの……？ 私を何だと思ってるのよ。

男2 (男3に) 馬鹿だなあ、お前は……。

男3 何が……。

男2 何がじゃないよ、馬鹿なんだよ、お前は、馬鹿。

女1 何聞いてたのよ、いったい。そうじゃないって話してる最中じゃないの。

男2 、目の前に一枚残っているのりをつまんで口へ……。男1の目が追う……。

男1 えーと、おや……？

男2 え……？

男1 いや、いいんだけどね……。その……何だっけ、お前のか、それ……

男2 え……？（口に半分入れたものをつまみ出す）だって……、そうだよ。

男1 いや……、だからさ、さつきほら、あいつと話しながら手でつまんで、口へ入れたのがあったじゃないか、あれが、そうなんじゃないか……。いやいや、いいんだよ。いいんだけどね。だけど、そうだよ……。と、思うけどね……。

男2 えーっ。じゃ、お前、これ……。お前の……。いや、だけど……。そりやさっきしたしかに手で一まいやったけど……。何だい？　これはそれじゃ……。

男1 そうなんだよ。でも、まあ、いいよ。食べよ。いって。そんなことで、あれしなくても……。

男2 しかし、あれかなあ……。いや、俺も気をつけて……。

男1 だからいいよ。下らないよ、こういうことはね。でも、それはそうなんだよ。俺は最後に一まい、あれしようと思って、数えといたんだから。だけど、いいよ。いって。あれだろ、お前。たくわんもらったかわりに、あいつに一まいやったじゃないか、それ忘れてんだよ。

男2 いやいや、そんなことはないよ。本当だよ。そりゃあそんなことはないぜ。だって俺はあの時、そう思ったんだから。ああ、これで俺の分は四まいだなって……。だから、そんなことはないよ。だって、そりゃあそうだよ、そんなのないよ。

男1 じゃ、まあ、何かの感違いさ。ま、いいじゃないか。お茶。

男2 だけど、どうなのかなあ……。たとえば感違いしたとしてもだよ、おかしいじゃないか……

……。だって、いいかい。

女― よしなさいよ、もう、いいかげんに、何よ、のりいちまいのことで。

男― だから、いいって言ってるじゃないか。お茶。俺はそう言ってるよ、さっきから。ただ、あれじゃないか。ただ、それはそうじゃないってことを言っただけじゃないか。何言ってるんだいったい。(男2に) おい、ぐずぐずしてないで食っちまえばいいじゃないか。いいって言うてるだろう、俺は。

男2 そんなに怒んなくたっていいじゃないか。

男― 怒ってやしないよ。だから、そういう意味で怒ってるわけじゃないだろう。のり一まいがどのこう言ってるわけじゃないよ。さっきから、それはそう言ってるじゃないか。俺はいらないって。そうじゃなくてだなあ、俺の言ってるのは、いいか。ただ、お前は間違えたんだよって、そういうことじゃないか。変にかんぐるなよ。そうだろう。俺はのりが欲しいからそう言ったんじゃないよ。ただ、お前が間違えたってことを言いたかっただけなんだよ。そんなの当り前じゃないか。俺はね、のりが欲しかったら、それが俺の分だろうが、お前の分だろうがかまわず、くれっていうよ。それとも何か、お前……、まだそれが自分の分だと思ってるのか？

男2 だからさ、さっきから言ってるじゃないか……。

男― 違うよ。馬鹿言っちゃいけないよ、お前。それは……、誰にでも聞いてみりやあいじゃないか。いいか、俺は数えといたんだぜ。俺はさ、飯を食うときに四まい、お茶で一まいって

ふうに、計画してあったんだからな。もちろん、あれだよ、俺がこんなことを言うのは、それが欲しいからじゃないぜ。ただ、事実を言ってるんだぞ。だって、これは事実なんだからな。飯を食うときに四まい、お茶で一まいさ。聞いてみるよ、みんな知ってるよ。俺はいつもそうだからな。いや……、いつもじゃないけど、たいていそうだったよ。だから……。

男2、持ったのりを口へ入れてしまう。

男1 だから、いいんだよ、それは……。だって俺は、一度もそんなこといいやしなかったじゃないか……。 (あとはつぶやくように) そりゃあ、あったよ、一度だけ、飯食うときに五まいね……。だけど、一度だけさ。あとは全部、そうだよ、飯で四まい、お茶で一まい……。本当だよ……。

その五

解説者 昭和十二年、つまり餓死殉教の行の翌年二月十八日、東京朝日新聞夕刊は次の様に報じた。《十七日午後零時三十五分頃、宮城前広場の芝生に黒地に白字で「死のう」とのビラ数十枚を撒いた男が、何事か大声をあげながら着物の上から切腹を企てているのを通行人が発見、

救急車で日比谷病院にかつぎ込み手当中である。更にそれから十五分後、警視庁正面玄関内の大ホールに現れた二二、三歳、縞の着物に黒袴の男が端座し短刀をとり出すや腹に突き立て更に短刀を振りかぶっている姿を特別警備隊の藤本巡査が発見、短刀をもぎとり庁内五階の診断室に連れ込み手当中であるが、腹部三カ所に長さ三センチ全治四週間の負傷である。更に同四十五分頃、目下空家となっている元外務次官邸に現れた和服姿の青年がこれも短刀で切腹を企てたのを警戒中の警官二名が発見。これも手当中である微傷である。更に同時刻目下会議中の新議院の庭先に現れた三十七、八歳の男が正面と通用門の間で切腹を企てたのを発見、微傷。次は内務省三階便所に現れた二十七、八歳の男がこれも短刀で切腹を企てたのを守衛が発見、省内医務室で手当中であるが軽傷。これら五名は、いずれも「死のう団」団員と申立てている。以下、略……。警視庁は時を移さず日蓮会館を急襲し、残る党員を連行したが、切腹を企てた五名を含めて、取り締る法律がないため、全員釈放せざるを得なかった。彼等は「社会人になれ」という説諭を聞かされた後、帰宅を許された。

男2、3、4がミカン箱のようなものに坐っている。全員、腹のあたりを何となく気にしている。

男3 どうした……？

男2 (シャツの下へ手を入れ、腹のあたりを探っている) うん……。
男3 よせよ。
男2 うん……。
男3 かゆいのか？
男2 うんできたんじゃないかと思うんだ。
男4 うんで……。？
男2 ひどく、かゆいからな。
男3 でも、かくのはよくないよ。傷口がふさがるまではさ。
男2 しかし、しょうがないじゃないか。
男4 うむと、かゆくなるのか……。？
男3 バイキンが入ったらことだぜ。
男2 じゃあ、お前、どうしろって言うんだよ。
男4 実はさ、俺もさつきからかゆくてしかたがないんだけど、じゃ、やっぱりうんできたのか
な？
男3 よせて。 (男2の手を押さえる)
男2 (男4に) お前もかゆいって？
男4 そうなんだよ。

男2 しかし、ちっともかゆそうじゃないじゃないか。

男4 我慢してるからさ。

男3 みろ。みんな我慢してるんじゃないか。そうだよ。かくのは傷によくないよ。

男2 お前、本当にかゆいのか？

男4 かゆいよ。

男2 うそつけ。こいつのはうそだよ。だって、こんなのが我慢出来るわけがない。

男4 下腹に力を入れてないせいだ。お前、我慢出来ないはそのせいだよ。

男2 下腹に……？

男4 そうすれば、たいがいのこととは我慢出来るんだ。

男2 こうか……？

男4 そのまま、じっとしているんだ。

男2 ……。

男3 どうだい？

男2 何か、息がつまるよ。

男3 (男2に) お前息とめてんのか？

男4 やり方がまずいんだ。もう少しうまくなれば、息をしながら出来るよ、俺みたいだね。

男3 本当だ。おい、こいつは息をしているよ。

男2 息は、普通にするのか？

男4 普通に……。こういうふうには、ほら……。な。(男3に)で、ここ触ってみろ、(腹をしめし)固くなっているから。

男3 (さわってみて)固いよ。本当だ。(男2に)お前も触ってみろ……。

男2 (さわり)しかし、そんな事、出来るのかなあ……

男4 普通みんなはさ、下腹に力を入れてみろって言うよね、うんこする時のやりかただと思うらしいんだ。

男2 そうじゃないのか……？

男4 そうじゃないよ。そうやるから息をとめてしまうんだ。

男3 どんな風なんだ、お前のは……。

男4 だからさ、どういうのかな、もぐりこむような気持だね。

男2 もぐりこむ？ どこへ？

男4 つまり、腹の方へさ……。

男3 自分の腹へか……？

男4 そうだよ。ちよつと、下の方へずるようにしてみろ……。そう、そんな風だね、どうだい？

男3 何となく、あれだね……。

男2 うん……。みたいではあるけれど……。

男4 だから、すぐにはあれかもしれないけど、何度かやるうちにはね、うまくなるさ。(シヤツを持ち上げて、包帯を解こうとする)

男3 お前、何やってんだ？

男4 いや、ちよっと解いてみようと思ってね……。

男2 よせ、馬鹿。

男4 何故……？

男2 バイキンが入るじゃないか。

男4 大丈夫だよ。俺はもう何度もやってみてるんだ。あと、オキシフルを塗っとけば平気だよ。

男3 しかし、お前、明日医者へ行くんだぞ、バレやしないか？

男4 バレやしないよ。

男2 お前、もう何度もやってみたのか。

男4 いや、二度だけどね……。

男2 どうなってた……？

男4 だから、今、見せるよ。

男3 おい……。大丈夫かなあ。医者にはバレなくてもさ、傷によくないんじゃないかなあ。

男4 傷にもね、いいんだよ、これは時々風にあてた方が……。

男2 あれじゃないか。あの、最後のあれが傷にひつついてて痛くないか、はがすときに。

男4 だから、ちよつとね。ちよつとだよ。傷口にひつついてる奴をはがすのがちよつとあれだけど、たいしたことはないよ。血がちよつと出るだけさ。

男3 血が出るのか？

男4 この前の時はね。

男3 だけど、それはあれじゃないか、傷口をはがすからじゃないのか。そりゃよくないよ。そんなことしてたら、いつまでだって直らないぜ。

男4 いや、さつき、かゆいのはうんでるからだって言うからさ。それを調べてみようと思って……。

男3 そんなのは医者にまかすとけばいいじゃないか。そうだよ。うんだら、医者の責任だよ。(傷口を見て) いやあ、ひどいね。そうだろう、自分でこんなことしてたら医者の責任だなんて、言えなくなるよ。

男2 もう一寸ゆっくりやれ。ゆっくり。傷口はがすといけないからな。へーえ、こんな風になってるのか……。

男4 (男2に) ちよつと、こっち持っててくれ。いいか、ここはがすからな……。と。おお、痛い。

男3 おい、血が出てる。ほら、おい、ここに。血が出てるよ。

男4 大丈夫だよ。これくらいはいつもさ。鏡あったろう、どこかそのへんに。持ってきていた

んだよ。

男3 何するんだ？

男2 これか……？（手鏡を渡す）

男4 ああ、それだ。これじゃなくちゃ見れないんだよ。

男2 待て。一寸、おい見せてみる、へーえ。これか？

男4 うん。その辺だよ。一番大きいのがね。三カ所あるだろう？

男3 どら……？

男4 糸が見えるか？

男2 糸？ ああ、これか。本当だ、糸が見えるよ、おい……。

男3 どれ？ どこに……。え？ ああ、それが糸か……。へえ、ひどいもんだね。

男4 どうだい、うんでるみたいに、見えるかい？

男2 どうかなあ……。 （男3に） どうだい？

男3 うん……。よくわからないね……。これじゃあ……

男2 なあ、おい、これは何だ？ この右のわきの方のすり傷は？

男4 そりゃあ、あれだよ。お巡りに髪の毛ひっつかまれて引きずられた時にコンクリートの柱にぶつかったんだ。

男2 そうか。じゃ、お前がやったのは、ここからこっちの、これだけか。

男4 そうだ。(手鏡に傷口をうつしながらいじる)こっちは、そろそろ乾いたみたいだな……。

この辺がかゆいんだよ。これは何だ……？

男3 え……？

男4 ここにさ、ほら、何か……。

男3 ああ、かさぶただよ。よせよ。とれちゃうじゃないか。よせて。

男4 どうだい、何かちよっと、匂わないか？

いつの間にか、男2も、自分の包帯を解き始める。

男3 匂う……？

男4 包帯かかって、思ってみただけど、(かいてみて)それでもなさそうなんだよ。何か腐
ったみたいなの匂いがさ……。

男3 薬の匂いじゃないのか？

男4 いや、そうじゃなくてね……。

男3 (かいてみる)うん……。

男4 ね……？

男3 だからあれじゃないか、俺も良く知らないけど、直りかけの時、たいていこういう匂いが

するんじゃないのか。

男4 でも、何か腐ったみたいないな匂いじゃないか……？

男3 いや……、そうじゃないよ。大丈夫だよ。

男4 (男2を見て) 奴、始めてるよ。

男3 え……？ (と振り返り、はじめて気付いて) おい、よせよ、お前……。

男2 え？ (笑って) 何となくゾクゾクするよ。

男4 そうだろう。(男3に) お前もやれよ。さっぱりするぜ。

男3 いや、俺はよすよ。

男4 手伝ってやろうか……。

男2 うん……。

男4 だから、いきなりやるなよ。お前はじめてだから、ゆっくり……。

男2 いいよ。おい。いいって。俺がやるから。ちよつとはなれて見ててくれ。

男4 そうか……。 (男3に) おい、その救急箱こっちに持ってきといてくれ。血が少し出る

かもしれないから……。

男3 (救急箱を持ってきながら) 大丈夫かあ、お前……知らないぜ、俺は。傷口がなんかの拍子でパクンて開いちゃうことがあるんだぜ。

男4 何やってんだお前……？

男2 だから、ちよつとゆっくりやってんじゃないか。黙っててくれよ。何かね……、べったりくっついてやがって……。

男3 痛いか……？

男2 血、出たか。

男4 いや。だって、傷はまだ、ここだろう？

男2 よせって、触るのは。よせよ。俺がやってんだから。

男4 触りやしないじゃないか。

男2 だから、血が出たら、言ってくればいいんだから。いいな。

男4 いいよ。

男3 お前、そこでやめといたら、どうだ。え、それでいいじゃないか。あとは、医者へ行ったときにはがしてもらえば。

男4 医者だって、ベリツとはがすんだぜ。

男2 よせって。お前、そういうことというのはよせよ。

男4 わかった。わるかった。でもね、今やっとけば、医者へ行ったとき、楽さ。

男2 どうだ……？

男4 何が……？

男2 血のことを聞いてるんじゃないか。

男4 出てない。大丈夫だ。そう。そう。そう……。おっ、出てきたぞ……。

男2 血か……。

男4 いやいや、傷口がさ。いやあ、ひどいね、お前のは……。そう、それでいい。あ、ちょっと出たよ、血が、だけど、たいしたことない。大丈夫だよ（男3に）おい、脱脂綿。立派、立派。

男3 まだ、だいぶ、あれじゃないのか？

男4 （男3から脱脂綿を受取り）誰でも、最初あけたときは、こんなもんさ。（男2に脱脂綿を渡し）自分でやるか。

男2 うん。どこだ……。

男4 そのの……。そう。たいしたことはないよ。

男2 どうだろう……？

男4 うーん、お前、刺しといてからひっかきまわしたのか？

男2 おい、手鏡……。そうでもないんだけどね……。ひどいかい。

男4 ひどいねえ、これなら、かゆいはずだよ。（男3に）なあ、おい。

男3 （男2に鏡を渡し）え、うん……。

男2 （鏡にうつして）えーっ？ 本当だ。こいつはひどいや……。

男4 これが一番深いのかな……？

男2 おい、よせよ。

男4 うん……。だから、そうらしいね、ここだけぬってある。(男3に)おい、ほら糸が見えるぜ。

男2 どこだい？

男4 そこに、ほら、ちょっと……。だから、貸してみろ。(鏡をとり)こうすれば見えるだろう。

男2 あ……。あ、本当だ。見えたよ。

男4 (つくづく見て)ふーん、たいへんなもんだよ、これは。横へ引っぱったのかな、こっちへ、こう……？

男2 何かね、よく覚えてないんだけどね。夢中でき。(男3に)お前のも見せろよ。

男3 いや、俺のはたいしたことないよ。ちょっとあれしただけだったからね。

男4 かすったのか？

男3 刺したよ。刺すには刺したけど……。

男4 (男2の腹を示して)この辺か……？

男3 うん、だろうと思うけど……。

男2 見せろよ。

男3 うん……。

男4 見せてみな。たいしたことないって。痛いって蚊が刺したくらいのもんさ。だって、お前だってみたいだろう。

男3 ま、いいよ。それじゃ、ちよっとこっちいくるなよ。(包帯を解きはじめる)

男4 スースーするだろう。

男2 うん。ちよっと寒いや。

男4 傷にはいいんだ、その方がね。でも、あれだけ、見ただけじゃわからないけど、うんじやいないみたいだぜ。

男2 この辺どうだ、この……。

男4 ああ、そこが一番ひどいよ。

男2 どうなってる……？

男4 どうって……、もうちよっとこっち向いてみる。え、何かくっついてるぞ。これ、何だろう……。

男2 よせ。俺がやる。何だって……？(鏡を手にして)

男4 だから、包帯の切れっぱしかな。とってやるよ。(救急箱からピンセットをつまみあげる)
とっちゃた方がいい、そんなものは……。

男2 これか……？

男4 それだよ。どう、ちよっとどいてみる。とってやるから。

男4 でも、どうなんだ。べったりくっついてるじゃないのか。

男2 よせ。よそう。いいよ。放つところ。医者に何とかさせるよ。

男4 でも、お前……。

男3 くるなよ。今……。あれだから……。

男2 どうだ？

男3 だから、くるなって……。今……。畜生、とれた……。

男4 どう……？

男3 鏡。鏡どこだ？

男2 ぜんぜん乾いちゃってるじゃないか。

男4 本当だ。そこんとこだけなんだな。

男3 (鏡で見ながら) ちっちゃいんだよ。いきなりお巡りに蹴つとばされて、ひっくりかえっちゃったからな。これしか、出来なかった。

男2 お前のはいいよ。それはもう直ってるよ。包帯なんか、いらんないじゃないか。

男4 いらんないね。そうなっちゃったらもう、包帯なんかしとかない方が、直りがいいよ。(男2の包帯を拾い) これ俺、使っていいかな。

男3 よせ。馬鹿。(取りあげ) まだ、ちよっとくっついてたよ。今、はがすときにね。お前、お前のやればいいじゃないか。

男4 俺の汚れちゃったからさ。

男3 (鏡で見ながら) 糸が見えるよ。

男4 触ってみろ、チクチクするから

男3 触る？ これにか？

男4 そつとさ。チクチクするよ。

男2 お前、触ってみたのか？

男4 ああ……。

男2 糸のどこにか……？

男4 そうだよ。人指し指出してみろ。(男2の人指し指をもって) いいか……。

男2 そつとやれよ。

男4 わかってるよ。ほら……。ほら……。ほら……。

男2 本当だ、チクチクするよ……。

男3 どら。おい、俺にもやってみてくれ。

男4 お前、自分でやればいいじゃないか、鏡持ってたんだから。

男3 糸んところを触るのか？

男4 そうだよ。だけど、お前のはもう乾いちゃってるから、どこ触ったって大丈夫だよ。わか
んないのか、どら……。

男3 わかった。わかったよ。一人でやるよ。へーえ、本当だ。チクチクするよ。

男2 (一人でやりながら) え、変な気持だなあ。本当に、チクチクするよ。(一人でくすくす笑う)

男3 でも、何故だろうな。

男4 だって、あれだよ、糸があるからさ。それが引っぱるんだ……。 (自分でもやってみる) 何となく、あれだね……。 (くすくす笑って) くすぐったいみたい……。

溶暗の中で、三人、いつまでも、ひそかに笑いながら、傷口をいじっている。指の先の匂いをそっと嗅いだりしている。

その六

解説者 切腹事件の後、「日蓮会」は完全に壊滅し、会館にも、盟主江川桜堂をかこんで、数人の党員が寝泊りするだけになっていた。

六人が、風船投げの儀式を、ものうく、くり返している。

解説者 桜堂は、餓死行のせいも極度に身体が衰弱し、間もなく大森の病院に入院したが、病状は更に悪化し、昭和十二年秋には、東大病院へ移った。会館に寝泊りする黨員達の稼ぎは、ほとんどすべて、桜堂の治療費にあてられた。

男1 (受けとり) だから、そうじゃないって言ってるじゃないか。とてもじゃないけど、そうはいかないさ。(投げる)

女1 (受けとり) 私はあれね、あの人の言った通りよ。だって、そうでしょ。当然だと思うわ。(投げる)

男2 (受けとり) いいよ。だから、いいさ。どうでも言ってくれよ。だけど、あれだぜ、まるっきりその通りとは言っていないんだからな。(投げる)

男4 (受けとり) そうだけどさ。それでどうってほどのことは、ないと思うけどね。(投げる)

女2 (受けとり) そうかしら、だって、もしそうだとしたら、こっちの方はどうなるの。どうでもいいの?(投げる)

男3 (受けとり) まあさ、何がなんでもってわけじゃないんだからな。俺はいいよ。だから、それでね。(投げる)

以上のやりとりは風船を受けて、投げるまでの間に、それぞれが言うことである。この間、投げない人間が、「だけどさ」「それで」「しかしだよ」「どうして」「たとえば、いいかい」「何故」など、主要な科白にややかぶさり気味に発言することになる。

解説者 昭和十三年に入っても、桜堂の病気は好転しなかった。中耳炎と肋膜と結核を併発し、医者も完全に見放していた。そこで同年三月十五日、医者がとめるのもきかずに退院。黨員たちの待つ、会館に帰ってきたが、十九日、容態が急変……。

男4 (受けとり) たとえばさ、それがそうだとしたよ、そっちはどうなるんだい。(投げる)

女2 (受けとり) だから、言ったでしよ。これはこっちのことだって。さっきから何度も言うてるじゃないの。(投げる)

男3 (受けとり) とにかく、あれだね。そっちがそうだって言うんなら、こっちも何しなくちや。(投げる)

男1 (受けとり) ただ、あれだよ。どちらにしろ、そうはならないと思うからね。そのことだけは考えといた方がいい。(投げる)

女1 (受けとる) ……。(何も言わない。以下、この人は完全に沈黙……)

他の五人がすべて動作をとめ、ふと気をのまれたところへ……。

解説者 死を目前にした桜堂の枕頭で、女性党員が一人突然致死量の二倍の青酸カリを服んで自殺した……。

女 1 (投げる)

男 2 (受けとり) とにかく俺はそう思う。それだけだね。(投げる)

男 4 (受けとり) だからさ、そんなことはわかってるよ。それだけじゃなく。(投げる)

女 2 (受けとり) とんでもないわ。そうだなって、(投げる)

男 3 (受けとり) 何だか、あれだね、そうだとすれば。(投げる)

男 1 (受けとる) ……。(以下沈黙)

解説者 翌二十日午前五時三十分、江川桜堂も絶命した。ときに三十四歳である。

男 1 (投げる)

女 1 (受ける。投げる)

男 2 (受ける) だから、そうだとすればだよ。あとはむこうの問題さ。(投げる)

男 4 (受ける) そう言っつてしまえば簡単だよ。何だつてね。(投げる)
女 2 (受ける) 何かねえ、はっきりしないところがあるのよ。(投げる)
男 3 (受ける) そうだとしても、しょうがないね。これはもう……。 (投げる)
男 1 (受ける。投げる)
女 1 (受ける。投げる)
男 2 (受ける) ……。 (以下沈黙)

解説者 桜堂が絶命した日の午後、男性党員の一人が、短刀で真一文字に腹を切り、そのうえ、青酸カリを致死量の四倍飲んで死んでいるのが発見された。

男 2 (投げる)
男 3 (受けとり) だから、どうだって言うんだよ、いったい？ (投げる)
女 2 (受けとり) そうじゃないんじゃないかって言ってるだけじゃないの。(投げる)
男 3 (受けとり) そんなことは、最初からわかってるじゃないか。(投げる)
男 1 (受けとり、投げる)
女 1 (受けとり、投げる)
女 2 (受けとり、投げる)

男4 (受けとり) ……。(以下沈黙。そのまま投げる)

女2 (受けとり) ……。(以下沈黙)

解説者 更に、盟主桜堂と二人の男女党员合同葬儀をすませた後の二月二十五日早朝、残った三人の党员の内二人が、会館内で枕を並べて服毒自殺した。

女2 (投げる)

男3 (受けとり) そんなこと言たってしょうがないよ。俺は、だって、そうだったよ。最初から、そう言ってたじゃないか。(投げる)

風船が、男1↓女1↓男2↓男4↓女2↓男3とわたっている間に、解説者の声が入るところになる。

解説者 一人残った党员は、死んだ二人の党员の葬儀を終えると、会館の中に一人泊りこんで桜堂の書き残した書類の整理をはじめた。終日仕事に没頭し、同年六月一日には「護法・創刊号」を自ら執筆し、謄写板で刷り、二部だけを発行した。

男3 (受けとり) そうじゃないよ。いいかい、それだけはそうなんだ、そうじゃないんだよ。だって、言ってるじゃないか。(投げる。以下、風船が、男1↓女1↓男2↓男4↓女2と渡っている間、しゃべりつづける) そりゃわかるよ。わからないなんて言っちゃいけないさ。ただね、この場合は違うよ。この場合はだよ。そんなこと、わかりそうなものじゃないか。ほらあの時言ったらう。そう言ったよ。そのことを言ってるんだぜ。だって、いいかい。俺がだよ。俺がそんなことをするわけがないじゃないか。だから、それは違うよ。あの時の話は違うじゃないか。だって、まるつきり違うよ。まあいいよ、じゃ、その時のことはそうするよ。しかし、今はどうだい。正直言ってくれよ。そうじゃないだろう。だって、そんなことはもう、何度も、何度も、しゃべったじゃないか? 本当だよ。何度くり返せばいいんだよ。な。そうじゃないか。これはわかるはずだよ。そうでないはずがないんだから。だって、いいかい。ね、これは本当だよ。本当なんだ……。(受けとる) ……。(以下沈黙)

風船のやりとりだけ、ものうくつづけられながら……。

解説者 六月十日の朝、彼は浦賀に行き、そこから千葉県竹岡行き定期船湖南丸に乗り、沖合四キロの海上にさしかかった頃、デッキから「死のう」と絶叫、ビラを海中に撒き、自らもまた海中に飛びこんだのである。ビラには「立正安国顕正国広宜流布」と記されてあった。死体

はあがらなかった。海の流れを調べ、絶対に死体があがらないよう死ぬべく計画していたことが、会館に残された地図帳によって判明した。残されたメモには、辞世の句が記されていた。

「あとやさき、誓いを果たして師のもとに、散るや桜の鷲の山みち……」（くり返す）

風船のやりとり、ものうく続いて……

暗転

——なお、文中「死のう団」に関する記述は、すべて保阪正康氏「死なう団事件」（れんが書房）に拠った。ここにお断りすると共に、厚く御礼申しあげます。

〔上演のための註〕

六人の服装は、特に当時のものである必要はない。他のものも、すべてそうである。もちろん、ことさら現代風に際立たせる必要もない。観客には、それが微妙にわからない程度が一番いい。解説の仕方は、自由である。黒板などを使って、要所要所を字にするのも可。黒白だんだんの

幕は（その一）と（その4）のみに使用のこと。

定本

『別役実 第四戯曲集 数字で書かれた物語』
三一書房

一九七四年十一月三十日

第一版第一刷発行